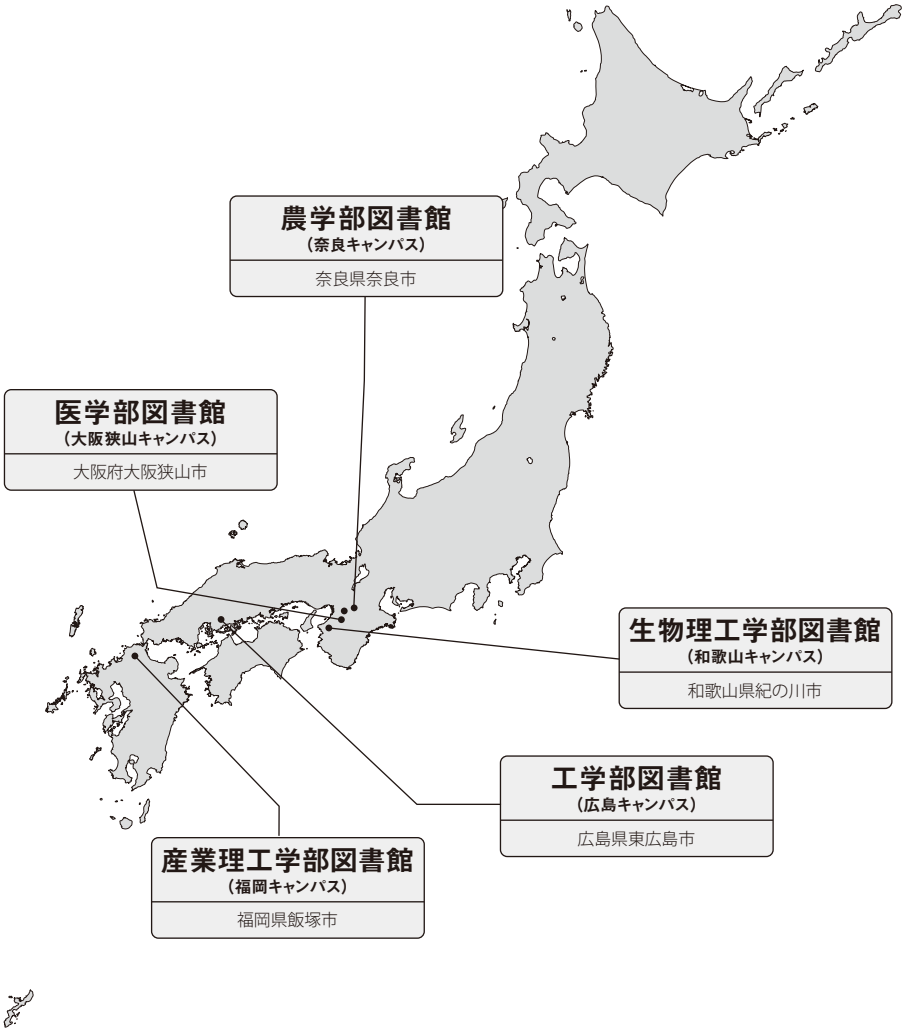
各キャンパス図書館めぐり



私の医学部図書館
−学生時代、現在、そして今後に向けて−

医学部図書館長　奥村　二郎

1．はじめに

私は、長年近畿大学に奉職しておりますが、本学医学部3期生の卒業生でもあり、医学部図書館とのかかわりは大学院生時代を含む学生時代の方が深く長かったように感じています。当時の学生は、試験前になると勉強の場がない人が図書館に集まって勉強していました。私は、医学部時代、図書館に入るところまでに至らず、図書館前の休憩コーナー？で、朝から新聞や雑誌の類に毎日目を通して今の専門の基礎となる社会勉強をしていました。ゲノム生化学の大学院時代は、一転して、地下の蔵書室にたてこもって、朝から閉館時間まで論文のコピーに明け暮れていました。1つの論文からReferenceの論文を探すのですが、この図書館によくもこれだけ多種多様な医学の専門雑誌の実物があるのに驚くばかりでした。相当暗くて、換気が届かないところで、同様の目的の先生方が来られるとコピー機を譲り合うといった奇妙な光景が懐かしいです。当時は、海外でみた大学の図書館が24時間あいているのが非常にうらやましく感じていたことを記憶しています。

2．現在の図書館

現在の図書館は、蔵書約12.5万冊、座席数170席の医学の専門図書館です。1年間の入館者数がのべ約2万人、貸出冊数が約4000冊となっています。現在、本や雑誌の電子化が進み、学術情報の収集手段がインターネット経由になってきています。私の学生時代からの念願の24時間対応も現実のものとなっており、医学部図書館の充実ぶりにもここまで来たかということで感無量です。また、以前に勤めていた国立の研究センターの病院では、これほど契約している学術雑誌が多くなく、総合大学ならではの充実ぶりに感心しています。現在、実際に保存されている図書はやや漸減傾向ですが、医学部学生や研修医に対する学修情報ツールの電子化への対応が重要になってきています。データベースをどのように使うのか、利用者への支援が医学部図書館の新たな役割です。課題としては、どのようなコンテンツを導入して学修支援を行っていくのか、研究のスピードが速い医学の世界では、使われなくなったコンテンツやツールを選ぶことも悩ましいですが重要な作業となっています。

3．これまでのコロナ対策

近畿大学病院では、外来受診の際の手洗い及び手指消毒、マスク着用、検温に始まり、マスクを着用しない患者の診察や治療をお断りしてきました。また、病院が来院をお願いした方以外は、入院患者への面会が現在も禁止となっています。このような中、医学部図書館では、新型コロナ感染がひろがった時期から引き続き休館することなく、開館時間の短縮や学生の立入制限、貸出期間の延長などで、その機能を維持してきました。

4．キャンパス移転に伴う、これからの医学部図書館

医学部及び近畿大学病院が大阪狭山市から堺市の泉が丘へ移転するに伴い、医学部図書館も2025年秋の引っ越しを準備しています。建物が新しくなるほかに、外観が大きく変わる訳ではありませんが、電子化のさらなる推進に伴い、実際の機能や図書館への期待も大きくかわっていくと考えられます。今までは、別館的な建物の中にありましたが、医学部本体の建物の一部として新築されますので、図書館の空間自体が教員や学生の生活空間に溶け込むなど、医学部図書館としても新しい時代の幕開けになると期待しています。